

本山町埋蔵文化財調査報告書第9集

高知県長岡郡本山町

# 土居屋敷跡遺跡

1998・3

高知県長岡郡本山町教育委員会

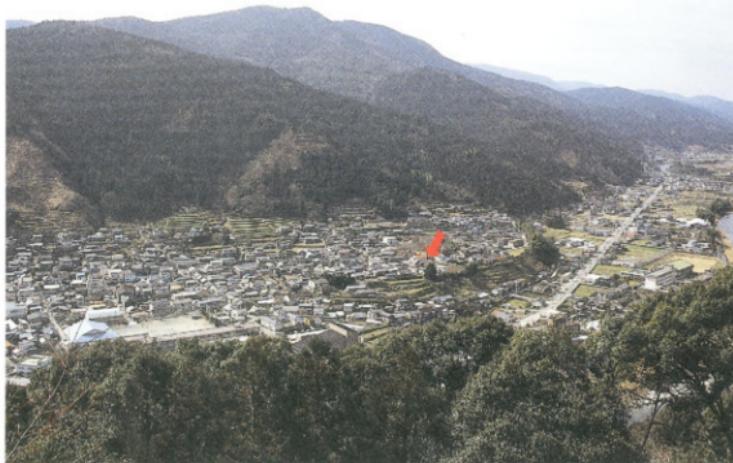
高知県本山町

# 土居屋敷跡遺跡

1998・3

高知県長岡郡本山町教育委員会

卷頭カラー



遺跡遠景（東北より）



2区全景（北西より）

## 本文目次

巻頭カラー

序・例言

目次〈本文目次・挿図目次〉

第Ⅰ章 調査に至る経緯 ..... 1

第Ⅱ章 遺跡の環境 ..... 2

第Ⅲ章 調査の成果 ..... 9

第1節 発掘経過 ..... 9

第2節 層序 ..... 10

第3節 検出遺構 ..... 12

1区／2区(SX1)

第4節 出土遺物 ..... 14

SX1／2区出土遺物／1区出土遺物／3区出土遺物／その他の遺物

第Ⅳ章 まとめ ..... 26

第1節 長宗我部地検帳から見た本山氏の土居について ..... 26

第2節 土居屋敷跡遺跡出土遺物について ..... 26

第3節 土居屋敷跡遺跡の石垣について ..... 30

第4節 焼塩壺について ..... 31

焼塩壺の分類／高知県の焼塩壺／香川県の焼塩壺／愛媛県の焼塩壺／徳島県の焼塩壺

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図 高知県位置図.....	1
第 2 図 本山町遺跡分布図.....	3
第 3 図 遺跡周辺図.....	5
第 4 図 本山町地籍図.....	6
第 5 図 本山町現況地割図.....	7
第 6 図 遺跡周辺現況図.....	9
第 7 図 トレンチ配置図.....	10
第 8 図 層序.....	11
第 9 図 1区遺構平面図.....	12
第 10 図 2区SX1平面図 .....	13
第 11 図 SX1出土遺物(1) .....	15
第 12 図 SX1出土遺物(2) .....	16
第 13 図 SX1出土遺物(3) .....	17
第 14 図 2区出土遺物(1) .....	19
第 15 図 2区出土遺物(2) .....	20
第 16 図 1区出土遺物.....	21
第 17 図 3区出土遺物.....	22
第 18 図 その他の遺物.....	23
第 19 図 本山土居絵図.....	27
第 20 図 石垣南面東端の構築.....	28
第 21 図 裏門跡.....	29
第 22 図 刻印を持つ四国の焼塙壺.....	33
第 23 図 焼塙壺の中間品.....	35

## 表目次

第 1 表 遺物観察表.....	24
第 2 表 四国の焼塙壺の形態と個数.....	32
第 3 表 刻印を持つ焼塙壺掲載報告書.....	34

## 序

「花のまち」であると同時に「史跡のまち」でもあります本山町は、四国のほぼ中心にあり、古くから交通の要衝として重要な役割を果たしてきました。本山町は文化や歴史にまつわる素晴らしい見所を持つ町です。数多くの遺跡には、歴史を築いてきた先人たちの営みがしっかりと刻み込まれています。

このたび、上街公園整備事業に伴い土居屋敷跡の事前発掘調査を実施しました。土居屋敷は江戸時代の野中兼山のゆかりの地であり、また参勤交代の宿泊所となるなど重要な史跡でしたが、明治時代には屋敷は取り壊され、今は石垣等が当時の面影をとどめるにすぎません。今回、裏門跡が発見されるなど往時の屋敷跡をしのぶことができました。また県内では出土例の少ない焼塙壺が発見され、当時の食文化並びに物資の流れを知る上で貴重な発見となりました。

これら残された貴重な文化遺産を保存し、後世に残していくことが私たちの使命であると考えております。現代を知り、未来を展望していく上での羅針盤として、これからも大切にしていきたいと思っております。

終わりになりましたが、発掘調査、報告書作成にあたり、調査員、発掘作業に従事して頂いた方々をはじめ、高知県教育委員会文化財保護室、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターなど関係者各位に対しまして、ここに厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

本山町教育委員会

教育長 和田 聖 寛

## 例　　言

1. 本報告書は高知県長岡郡本山村本山837-2に所在する「土居屋敷跡遺跡」の発掘調査報告書である。高知県教育委員会発行の「高知県遺跡地図－香美・長岡ブロッカー」(平成2年)では「本山土居ノ城跡」として搭載されているものの、本報告書では「土居屋敷跡」の名称を使用した。
2. 本山村教育委員会が本山村本山の上街公園の石垣補修に伴い公園内に所在する「土居屋敷跡遺跡」を平成7年2月に事前調査を行ったものである。発掘調査は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員前田光雄が担当した。事務全般は本山村教育委員会和田浩二(平成7年度)、前田幸二(平成8年度)、渡辺徳仁(平成9年度)が担当した。
3. 本書の編集は本山村教育委員会が行い、編集実務は前田光雄が行った。また整理作業・編集・本文執筆等を(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査補助員松田重治の協力を得た。前田が第Ⅲ章1・2・3節、松田が第Ⅲ章、第Ⅲ章4節、第Ⅳ章をそれぞれ執筆した。  
また石垣実測は㈱アイシーにお願いした。
4. 発掘作業及び整理作業で下記の方々の協力を得た。  
発掘作業 竹田瑞男、今西和秀、樋口佳伯、小松和則  
整理作業 松田重治、山中美代子
5. 発掘及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関から助言・教示を賜った。記して感謝したい。(敬称略)  
小野由香、松田直則、吉成承三、渡辺誠、高知県教育委員会文化財保護室、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、高知県立歴史民俗資料館、安芸市立歴史民俗資料館、㈱アイシー、㈱共運工業

# 第一章 調査に至る経緯

平成5年度当初に本山町指定文化財土居屋敷跡（本山町四区）南側の石垣の破損がひどく、住民から危険であると町へ申し出があり、本山町教育委員会が町関係者と本山町文化財保護委員会で現地確認をしたところ、人家への崩壊が心配され危険であるとの判断、文化財の保護も考えた上で石垣の改修工事を緊急に行うことになった。また、改修する石垣近くにあった老朽化により利用が困難となっているトイレが改修作業に支障をきたすためトイレを移転、あわせて吾妻屋の改修を行い公園全体を子供から大人までが本山の歴史・文化を学ぶ場所とし、安心して安らげる場所とした公園整備を行うことになった。

平成5年度に本山町上街公園整備事業（土居屋敷跡整備）とし、石垣の改修、案内板を設置した吾妻屋の整備、トイレの整備による計画が出され、これに伴う事前発掘調査費がふるさと創生費より発掘調査事業費九十万円が計上され、本山町文化財保護委員会をはじめ各関係者の協議確認を行なながら事前発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、本山町教育委員会が主体となり 側高知県文化財団埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受け、平成6年2月下旬から3月初旬に南側斜面の石垣から3メートルほどの幅での調査とトイレ移転先の公園入り口横、吾妻屋設置場所の調査が行われた。トイレ設置場所と吾妻屋設置場所では貴重な資料が出ず確認調査となつたが、石垣周辺では各時代に渡って貴重な遺構・遺物が出土し重点的な発掘調査となった。（本山町教育委員会）



第1図 高知県位置図

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

土居屋敷の所在する長岡郡本山町は高知県北部、四国山地の中央部に位置している。近隣5ヶ町村とともに嶺北地方と呼ばれる地域を形成する当町は、北の愛媛県伊予三島市、東の高知県長岡郡大豊町、西の土佐郡土佐町、大川村、南の香美郡土佐山田町、南国市に囲まれており、平野部は東西約11km、南北最長約1kmを測る。面積約134.36km<sup>2</sup>。本山町の中央部やや南寄りを四国最大の吉野川が本山町を南北に2分するように東流する。吉野川は当町付近で北と西を石鎚山地に、東と南を剣山地に囲まれ、その流路に沿って肥沃な河岸段丘と細長い平野を形成している。このような環境下にある当地域は古来より生活・生産の場として、あるいは瀬戸内地方と太平洋岸を結ぶルートの中継点として、また吉野川を通じて四国の東岸地方と繋がりを持つなど、交通の要所として発展し、当地域の政治・経済・文化の中心地であった。

本山町に所在する遺跡の多くは吉野川沿いに立地する。現在確認されているその最古のものは縄文時代早期の長徳寺遺跡(2)である。ここでは遺構は検出されていないものの、高山寺式と呼ばれる大型楕円押型文土器が出土すると同時に石錘が2個出土している。続く、前・中期の遺跡では松ノ木遺跡(3)、土佐町玉屋敷遺跡(4)の存在が知られる。後期になると遺跡数は増加し、中でも松ノ木遺跡は南四国の成立期縄帶文土器である松ノ木式土器の標式遺跡となっている。その他晩期前半の土佐町八反坪遺跡(5)、後半の突帯文土器を有する松ノ木遺跡の存在が知られる。これら以外にも下津野遺跡(6)や土佐町沖田遺跡(7)などの縄文土器散布地、晩期の磨製石斧を出土した上奈路遺跡などが存在する。

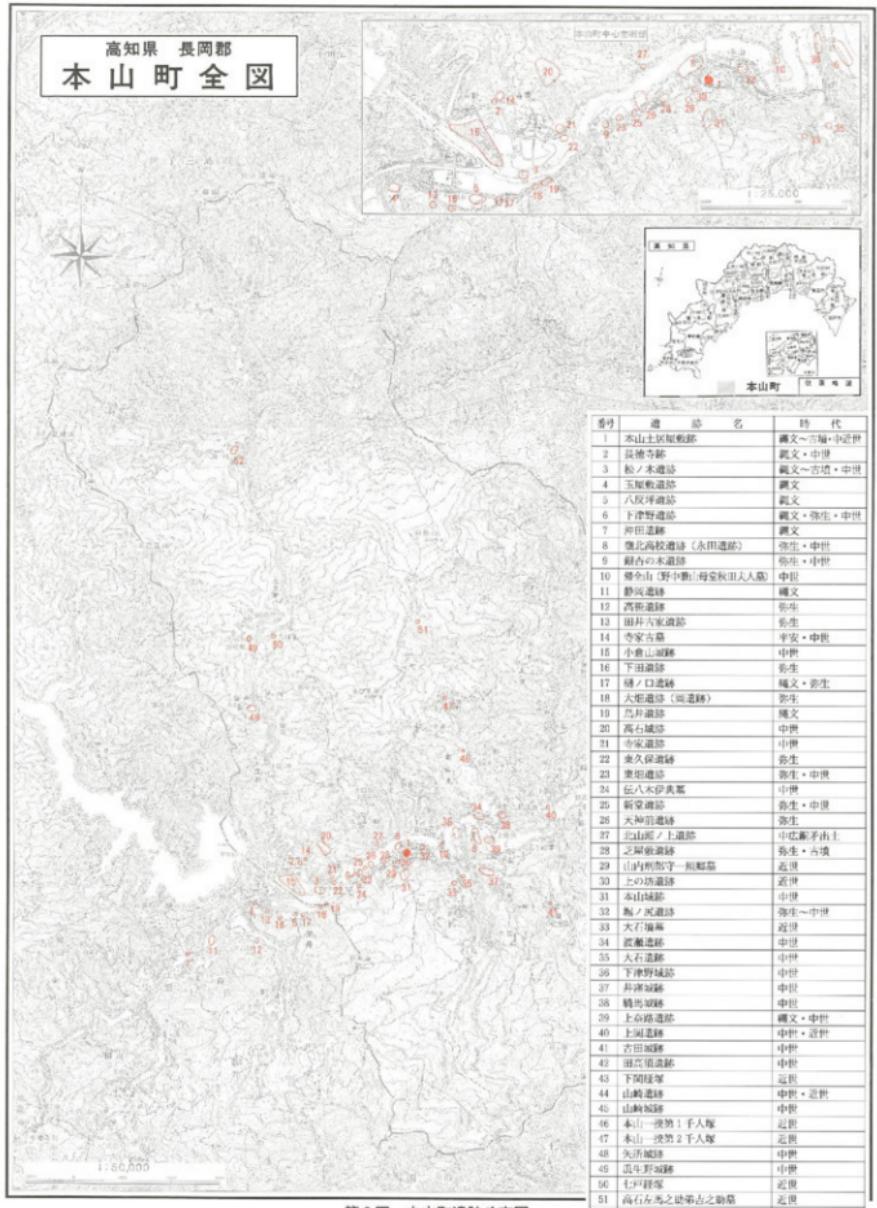
弥生時代になっても前期から遺跡は継続する。特に中期末頃から遺跡数は増大し、後期末から古墳時代初頭にかけて、その数は飛躍的に増加する。嶺北高校校庭遺跡・永田遺跡(8)、銀杏の木遺跡(9)や松ノ木遺跡などで多量のヒビノキ式土器や堅穴住居などが検出されている。また当町を含むこの地方では銅鐸や銅矛が數点確認され、高知平野とともに銅鐸・銅矛の錯綜地帯を形成している。

古墳時代前期の集落はいくつか知られているものの、前期古墳が全く存在していないことは特筆すべきである。

当地域の歴史は一旦ここで途切れる。その後、再開するのは古代に入ってからである。

延暦15年(796)南海道のルートが、それまで吉野川に沿って阿波へ入るものから四国山脈を越えて伊予へ至るものに変更された。それに伴って翌年、「吾椅」・「丹治川」に駅が設置されている。吾橋駅は当町寺家に推定されているが、平安時代後期の海路の発達とともに衰退していく。丹治川は大豊町立川に比定されている。またこの頃、この地に入部した八木頼則・盛政らによって久安5年(1149)に長徳寺が建立された。そして新たに開発した所領、「吾橋莊」は長徳寺領として紀州熊野神社に寄進されている。こうして成立した吾橋莊は鎌倉時代には地頭の支配下に入り、さらに守護の支配を受ける。建武の新政下では一時尊良天皇領として河俣因幡が代官となったが、やがて土佐七守護の一人に挙げられる本山氏の支配下に入ると、その実質を失った。

高知県 長岡郡  
本山町全図



第2図 本山町遺跡分布図

本山氏は田井山の北東尾根先端の本山城（31）を居城とし、現高知市の土佐郡朝倉城に移るまで本山村を本拠地とした。その後、長宗我部氏の攻撃を受けて本山郷内瓜生野城（49）で降伏している。天正17年（1589）の長宗我部地検帳（以下、「地検帳」）によれば、当村域には長宗我部家臣たちの給地・居住地が存在している。

本遺跡である本山土居屋敷（1）は吉野川南岸の低丘陵上、本山城の北方に立地する。戦国時代には本山氏の土居であったが、長宗我部氏に破れてしまらくは本山因幡守の子采女の居住地となっていた。地検帳に見られる「永田村」「北土居」に存在する「一反二丈二歩」の「トヤシキ」がこれにあたる。この他、地検帳には十王堂寺、新堂寺などの寺院も記載されており、山間地域の中心地であったことが窺われるが、近世初頭に村の再編成が行われており、その比定は困難である。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦で西軍にくみした長宗我部盛親は土佐一国を没収され、かわって同6年遠州掛川の山内一豊が入国した。山内一豊は政治・経済の拠点として、本山・佐川・窪川・宿毛・安芸の五土居に家老級のものを配置し、本山は重臣の山内刑部一照が支配した。同年11月には滝山（本山）一揆が起きるが、これを治めた功として彼の所領は2500石となり、さらに代官領1000石を別に預けられることになった。この一揆は長宗我部時代以来の土豪高石左馬之助が刑部の貢物上納の命を拒否して起ったものである。

刑部の死後、あとを繼いだ總頼但馬が元和6年（1620）、知行を没収され、佐川の深尾家に預けられると、しばらく本山土居は領主不在であった。10年後の寛永7年（1630）、土佐奉行職の野中直繼に預けられ、彼の死後はその養子である兼山が当地を知行した。この頃、土居の周囲には町屋も形成され、土居は当地の中心であった。兼山時代の本山土居は上中下の三層からなり、入口の下段には文武館が設けられていた。石垣を巡らせた中段には長屋門や諸建物もあり、上段が本邸宅になっていた。ここでは専ら彼の家族が過ごし、兼山は執政として高知城下に住した。

兼山は本山郷の耕地灌漑のために数々の用水路や堰を設け、耕地の水田化を図り、これらは現在に至ってもなお利用されている。一方、寛永20年（1643）、11ヶ条からなる本山掟を領民に対し提示し、藩政に応える農民の育成に尽力した。また帰金山にある母秋田夫人の墓（脚注）に見られる備葬は七佐の封建道徳の確立の画期である。

寛文3年（1663）、兼山が失脚すると翌4年、野中家は改易された。本山土居、邸宅は没収され、同9年まで家老山内下総の預かりとなった。以降、享保3年（1718）までは孕石頼母預かりとなる同10年から元禄12年（1699）を除いて藩士の在番となっている。享保3年からは本山倅役2人と本山土居屋敷門番が設置されている。また同年参勤交代のルートが北山越えに変更されると、土居屋敷はその宿泊所として利用され、同所は「本山の御殿」と称されるようになった。国境付近には道番所が、当地域には汗見川口に番所がそれぞれ置かれている。

江戸時代の当地域の村数は本山、大石など20ヶ村であったが、これは戦国期に比べると減少している。それらの諸村に現土佐町の一部と現人農町の一部を加えたこの地域一帯を本山郷と称したことは戦国期と同様である。そして、この行政区画は明治以降の廢藩置県や市町村制施行を経て、現在の本山町の姿に変遷する。

本山郷の地割を示すものとして、最も古いものは天正17年（1589）の長宗我部地検帳であるが、

第3図 通路周辺図

250m



それは地図として残されたものではなく、文章として存在するのみである。この地域の地割が地図として表わされるには明治期の地籍図（第4図）の登場を待たねばならない。しかし、これも区割りを示したのみで現在の地図上に符合させるには無理がある。ついで昭和47年（1972）に小字ごとの地図が作成された。しかし、これも小字によって縮尺半が異なり、また全体を見通すことができないため実用的ではない。そこで今回、1/5,000の地図を用いて吉野川以南の現況地割図（第5図）を作成してみたが、これと地籍図を対比しても配置的に少なからず変化が見られる。まして前述のように近世初頭に村の再編成が行われているため、中世のホノギ（小字）の復元となるとかなりの困難を極めよう。実際上居屋敷跡に比定される「永田村」の「北土居」は現在の十王堂に包括されている。今では中世ホノギを復元するには至らなかったが、中世とそれ以後の地割の変遷についても非常に興味深い。

## 【参考文献】

- 『日本歴史地名大系 第40巻 高知県の地名』 (角川) 平凡社 1983  
『角川日本地名人辞典 39 高知県』 角川日本地名大辞典編纂委員会 1986 角川書店  
『松ノ木遺跡』 本山町教育委員会 1992  
『永田遺跡』 本山町教育委員会 1995  
『堀ノ尾遺跡』 本山町教育委員会 1993



第4図 本山町地籍図

第5図 本山町現況地割図

# 第Ⅲ章 調査の成果

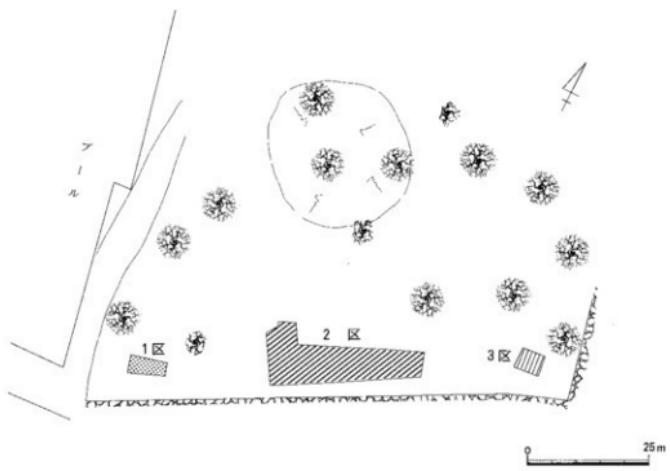
## 第1節 発掘経過

平成7年2月21日より同年3月17日迄調査を行う。南側部分の石垣の改修のための、事前調査であり、石垣に沿ってトレーナーを3ヶ所設定した。石垣が崩落する危険性があり、一旦石垣を取り除き再度同様に積みなおすことを前提としており、改修により大幅に遺跡が破壊されるわけではなく、遺跡の内容把握の確認の意味合いも込めて、調査を実施した。

土居屋敷跡遺跡は中世の状況は判然としないものの、近世になってからは野中兼山等の居宅、その後参勤交代の本陣となっており、嶺北地域の中心地となっていることから、各時代の遺構・遺物の検出が予想された。しかしながら、先に述べたように調査は最小限度に止め、西端に約3.2×1.5mのトレーナーを設け1区とした。1区の最下層からは弥生時代後期終末から古墳時代初頭の鉢が出土している。

2区は約12.5×3.2mで調査対象区の中央部に設けた。当初、表土層は重機による掘削を行っていたものの、表土層除去後に石積みを検出し、手堀りとした。この石積みについては現石垣の内側に面を合わせて積まれており、裏門か通用門の袖部分と考えられた。その部分の外側の石垣は2mの幅が本来の石垣とは違った積み方をしており、後世に封じられたことを覗していた。『皆山集』記載の古絵図では本土居にはこの裏門・通用門については描かれておらず、今回の調査により初めて判明したものである。また2区の西側部分では集石状に小礫の広がりを検出したため、部分的にトレーナーの拡張を行った。拡張部分では集石間に釘、瓦、陶磁器類が出土し、年代的には近代のものと想定された。文献等によると明治時代には屋敷





第7図 トレンチ配置図

は取り壊され、畠地となっており、小祠なりが存在していた可能性がある。この遺構についてはS X 1として調査を行った。

裏門・通用門と考えられる石積みより、東側については長さ約10m程トレンチの延長を行い、上層観察等を行った。

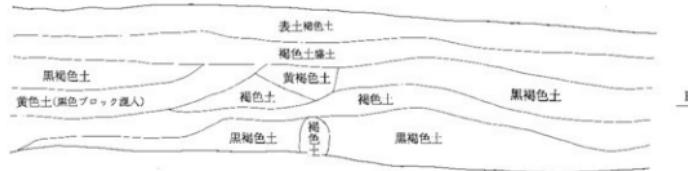
3区は $2 \times 1.7\text{m}$ で調査対象区の東端に設け、深さ約2mまでの調査を行った。旧地形が傾斜地となっており、盛土層が認められ、盛土の下からは骨片等が出土しており、塵芥が傾斜地に投棄されていたものと考えられる。

## 第2節 層序

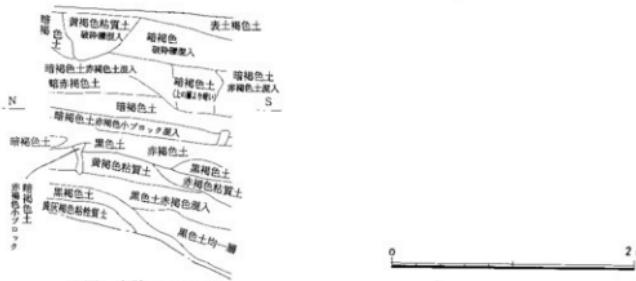
本遺跡の層序は大きく分けて、中近世と考えられる土層と、古墳時代の遺物を含む土層に分けることができる。中近世と考えられる土層は1m程厚く堆積を見せており、盛土・版築された可能性が高い。2区では特に門跡と考えられる石積みを確認しており、それに伴う版築が行われていたものと考えられ、黒褐色土・褐色土・黄褐色土を主体しながらも、層が煩雜に入り組んでいた。中近世の下層で古墳時代の遺物の包含層を確認している。層厚は20~30cmで色調は黒褐色土で粘性が強く、1区の古墳時代の包含層は黑色粘土層であった。古墳時代の包含層の下は基盤層となっている。



## 2区 南北セクション(中央部)



2区 北壁セクション



### 3区 東壁セクション

### 第8図 曆 月

3区では東南端部の傾斜地に位置しており、深さ約2.1mまで調査を行った。東南方向に傾斜堆積を見せており、2.1mまで自然堆積ではなく全て盛土であった。古墳時代の包含層及び基盤層は確認にまで至らなかった。盛土中には白色骨片を微量含んでいた。また近世の陶磁器類も少量含んでいた。

### 第3節 検出遺構

#### 1区

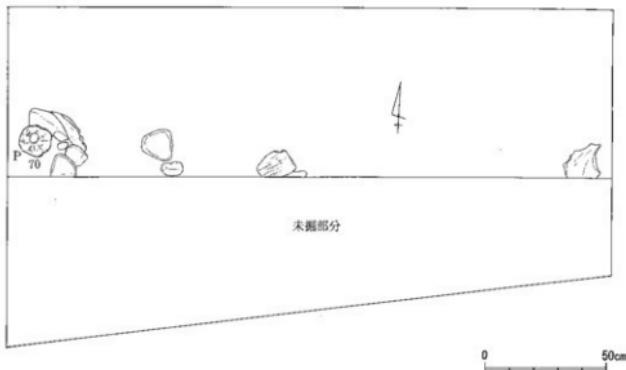
1区は調査対象区の西端に約1.2×2.5mのトレンチである。階段掘りを行い、トレンチ内北側部分を表土より約1.9mの深さで弥生時代末から古墳時代初頭の鉢が出土している。周りに礫が配石されており、何らかの遺構の伴うものと考えられるが、下部からは土坑等は検出されていない。また階段掘りの南側は最終的に掘り下げを行わなかったので、広がりは把握できていない。

#### 2区

##### S X 1

2区の拡張部分で集石状遺構を表土除去後に検出した。当初東側部分の石列を検出し、西側部分に調査区を広げると小・中礫の集中が認められ、更に北側部分にも集石は広がりを見せており、その集石を追って約2×3.5mを拡張した。拡張区より更に集石は広がるために全体像は把握できないものの石列とは違い、礫が平面的に広がり、石列より小振りの多量の礫で構成されている。

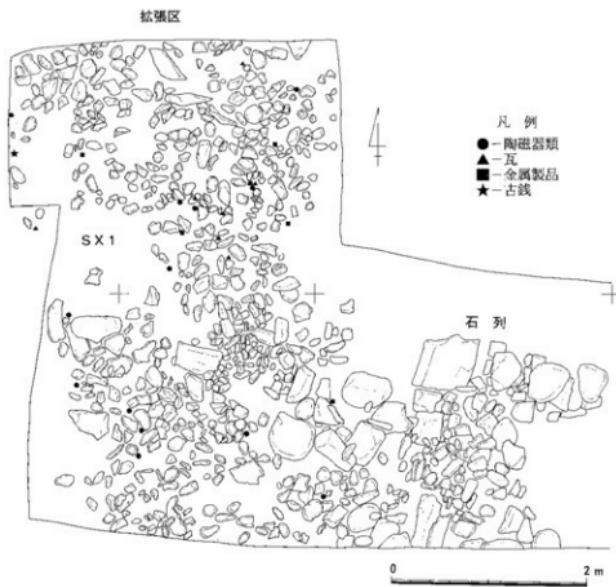
S X 1の本体は拡張部分に相当すると考えられ、南側部分の礫集中は西で途切れることから柄鏡状を呈し、S X 1本体の前庭か通路にあたる可能性が考えられる。S X 1本体及び周辺からは近世・



第9図 1区遺構平面図

近代の陶磁器類が疎間中より出土していることから、SX1は土居屋敷跡に直接伴うものではなく、土居屋敷跡の廃絶後に構築されたものと考えられる。SX1の存在した南側の土居屋敷跡木本の右垣には旧裏門が存在しており、裏門の痕跡として石列が相当しよう。その裏門自体は土居屋敷跡が廃絶された後も開口していたと考えられ、閉塞されるまでSX1も機能していたものの、裏門の閉塞後、SX1も機能しなくなったものと考えられる。SX1からは陶磁器類以外に瓦、鉄製品等が出土しており、小規模な上屋構造を持ち、集石は上屋構造の基礎部分に相当するものと考えられる。

周辺での聞き取り調査でもSX1についても、裏門跡についても手掛りは得られなかった。既に忘却された存在となっているようである。SX1は陶磁器類以外に瓦、鉄製品等が出土しているところから祠の可能性がある。または裏門に伴う通用門になる可能性があるものの、SX1本体からの出土した遺物を見ると祠の可能性がより強いものと考えられる。



第10図 2区SX1平面図

## 第4節 出土遺物

### S X 1 (第11~13図)

#### 金属製品

1~11は鉄釘である。体部断面の形状は1, 3, 5, 6, 8, 9, 11が方形, 2, 4, 10が円形, 7が長方形である。また2, 4, 6, 8, 9は下方を欠損し, 7は中央付近より「く」の字形に折れている。12は鉄製品で鍵の一部と思われる。体部は基部から弧を描きながら広がった後、基部とほぼ平行に前方へ伸び、先端で折り返している。13は方形の中央孔を持つ古銭である。「寛永通宝」である。14は銅製品で飾金具であると思われる。直徑0.1cmの釘孔及び中央部に台形の孔を有する。

#### 土器・陶磁器

15は磁器人形で唐子の頭部である。性別は不明であるが帽子をかぶり、髪はいわゆる「オカッパ」にしてある。中央付近の横断面は直径2.1~2.2cmでほぼ円形をなす。側面に接合痕がみられ、内部は中空である。近世の所産である。

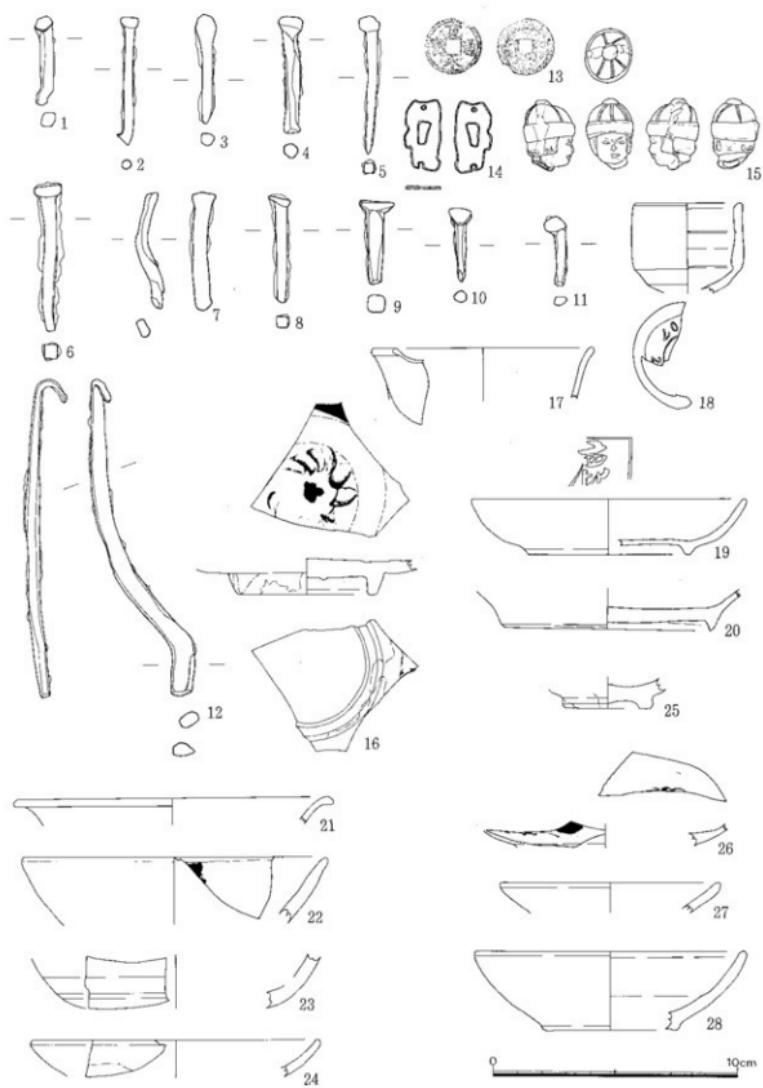
16は染付皿の底部であり、見込みに菊を描く。底面のかぶと幅は笠で切り取られ、焼成段階で蛇の目剥ぎを行う。16世紀代の輸入品である。17は磁器碗である。口縁部が半円形にくぼみ、体部外面にはわずかに染付文様らしきものが残っている。18は磁器杯である。外面底部付近にアラビア数字(0, 7, 2)を確認できる。また内面には沈線を1条巡らす。19は磁器皿である。断面逆台形の高台を持ち、見込に「鹿」の暗紋がみられる。16~19はいずれも近代の所産である。

20は16世紀後半の白磁皿である。断面逆三角形の高台を持ち、疊付および高台端部とその周囲は露胎である。また器面には低温焼成が原因と思われる、小さな亀裂が多数生じている。21は白磁反端り皿である。22は灰釉陶器碗である。内面口縁端部付近に鉄絵が残る。23は陶器碗もしくは杯である。体部外面下方にロクロ目が残る。24は皿、25は碗であり、ともに唐津産の陶器である。24の体部下半は露胎である。17世紀頃の所産である。25の高台は小さいながらも断面方形でしっかりとしており、削り出しによる成形が行われている。内面には釉が施されている他、外面には釉だれがみられる。26は染付皿である。内外面ともに文様が描かれている。27は素焼きの灯明皿である。口縁端部付近にはタールが付着している。28は素焼き杯である。ロクロ成形後、回転ナデによる整形を行っている。29は陶器であるが器種は不明である。鉢かもしれない。平底から内傾した後直立する体部を持つ。外面には格子又は櫻形に沈線状の彫り込みがなされる。内面はタタキによる成形が、粘土接合部以下にはナデ調整を施す。

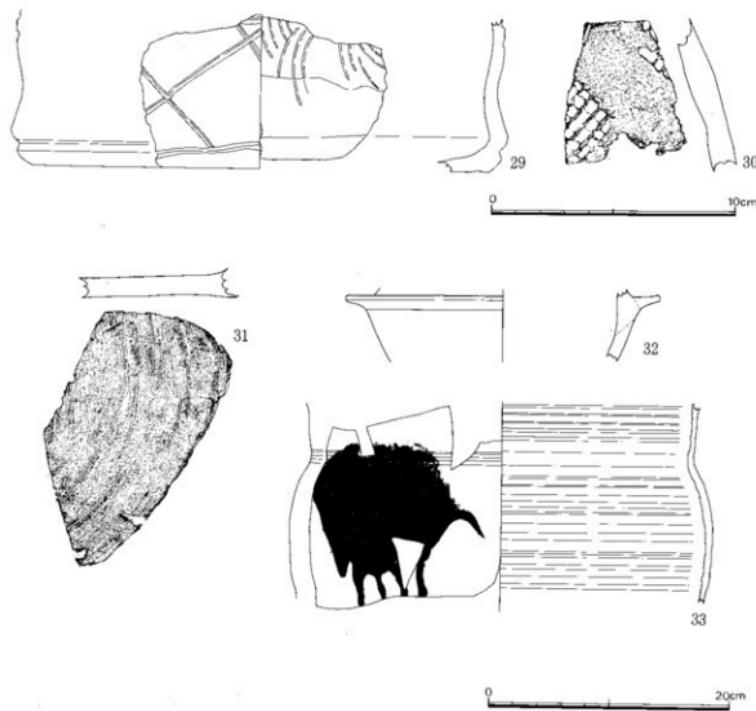
30, 31は備前焼である。30は壺体部である。31は底面であるが、内面には自然釉がかかり、外面にはナデ調整が施されている。

32は土師器羽釜である。先端を若干上方につまみ上げた断面台形の鈎が口縁部に対して平行に広がる。内外面ともナデ調整を行う。

33は陶器壺である。内外面ともナデ調整を行っている。19世紀の所産で、在地系の可能性がある。



第11図 SX 1出土遺物(1)



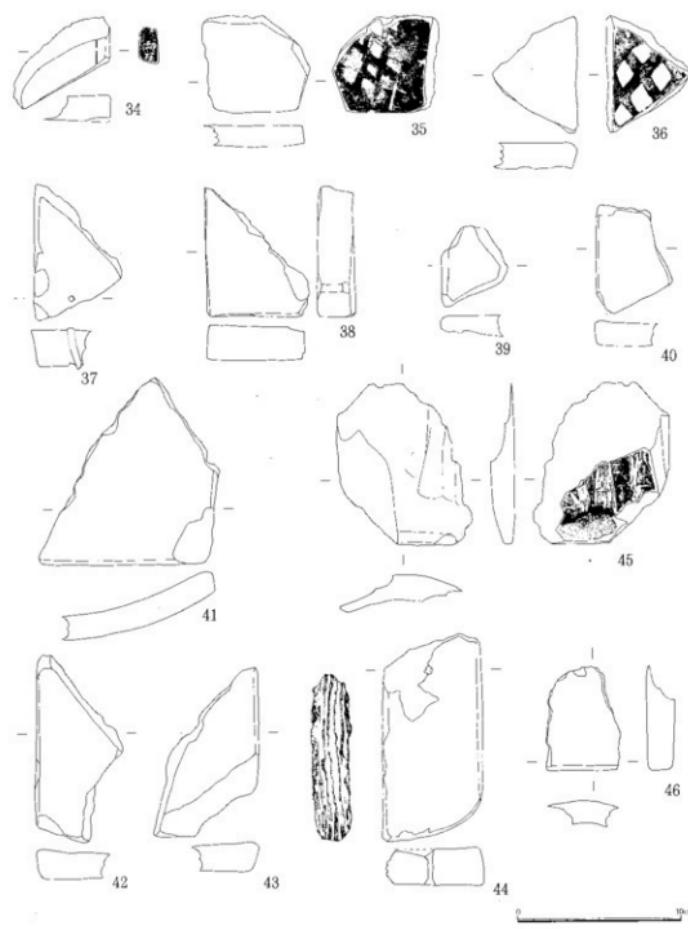
第12図 S X 1出土遺物(2)

### 瓦

34~44は平瓦である。これらのなかで34は側面に「御瓦…」が刻印されている。これには高知城出土の瓦に同范が見られ、従って欠損部は「師」が該当することは間違いないと思われる。享保12年（1727）に高知城を消失するほどの大火が起こり、その後、防火のため瓦葺の家屋を建てさせることにした。この頃、土佐藩の「御瓦師」となったのは安芸の五郎右衛門であった。それから幕末まで御瓦師として続くようである。このことから34は在地の瓦である可能性が高い。

35, 36には規則的な配列をみる菱形の模様が施されている。37には上面から下面に釘が打たれており、44にも釘孔が1孔残る。44には瓦当貼付部に沈線5条が認められ、形状も他の平瓦とは異なっている。

45, 46は丸瓦である。45はコビキB手法と外面ヘラケズリによる成形が行われている。



第13図 S X 1 出土遺物(3)

## 2 区出土遺物（第14、15図）

47、48は纏文土器深鉢である。47はやや内傾しながらも直立する口縁部外面に沈線1状を巡らす。48は直線的に開く口縁部を持ち、内面に段を有する。47、48ともに内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。いずれも縄文時代後期中葉に属するものである。

49は泥質片岩製の打製石包丁である。50は弥生土器甌である。やや外反しながら広がる口縁部は端部を上下に若干肥厚させている。口縁端部及び内外面にハケ調整を施している。49、50とも弥生時代終末～古墳時代初頭頃の所産である。

51は中世の鍋である。直線的に大きく開く口縁部は端部を下方へ拡張させている。内外面ともに摩滅が著しいが、口縁端部にかすかにハケらしきものが認められる。

52～58は土師質土器である。52、53、56、57は皿、55、58は杯、54は器種不明である。54、58は内面にロクロ目が残り、56～58はいずれも底部に回転糸切りの痕跡がみられる。

59、60は擂鉢である。59擂目は6条以上を1単位とし、擂目と垂直に沈線状の凹み現存で3条巡っている。60は6条1束を単位とする擂目を横方向に巡らせる。

61は16世紀、龍泉窯系の青磁碗である。しっかりした高台を持ち、見込には菊のスタンプを捺している。また、釉は全面に施されている。62は染付皿である。断面方形の高台を持ち、内外面に文様を描く。63、64はともに能茶山産の可能性のある染付であり、63は皿、64は碗である。63は内面のみ線で構成される文様が、64は内外面に文様が各々描かれている。65も能茶山産の可能性がある陶器天目茶碗である。内外面とも鉛色の釉を施すが、体部下半は露胎である。63～65はいずれも近世に属するものである。

66は近代の陶器蓋である。全体をナデ調整しており、体部外面2ヶ所に明確な陵を有する。口縁部下面に光沢がある。

67は堺より搬入された焼塙壺の身である。現在の「湯のみ」のような形状を呈し、輪積み成形で2次焼成を受けて赤色に変色した内面には布目压痕が見られる。口縁端部付近は内面に強いヨコナデ調整を施し、外表面は摩滅が著しく刻印の有無や調整は不明であるが、面取りを行っている。また、底部は粘土を充填している。

68は陶器底部である。外表面は摩滅のため調整は不明であるが、内面及び底面にナデを施す。

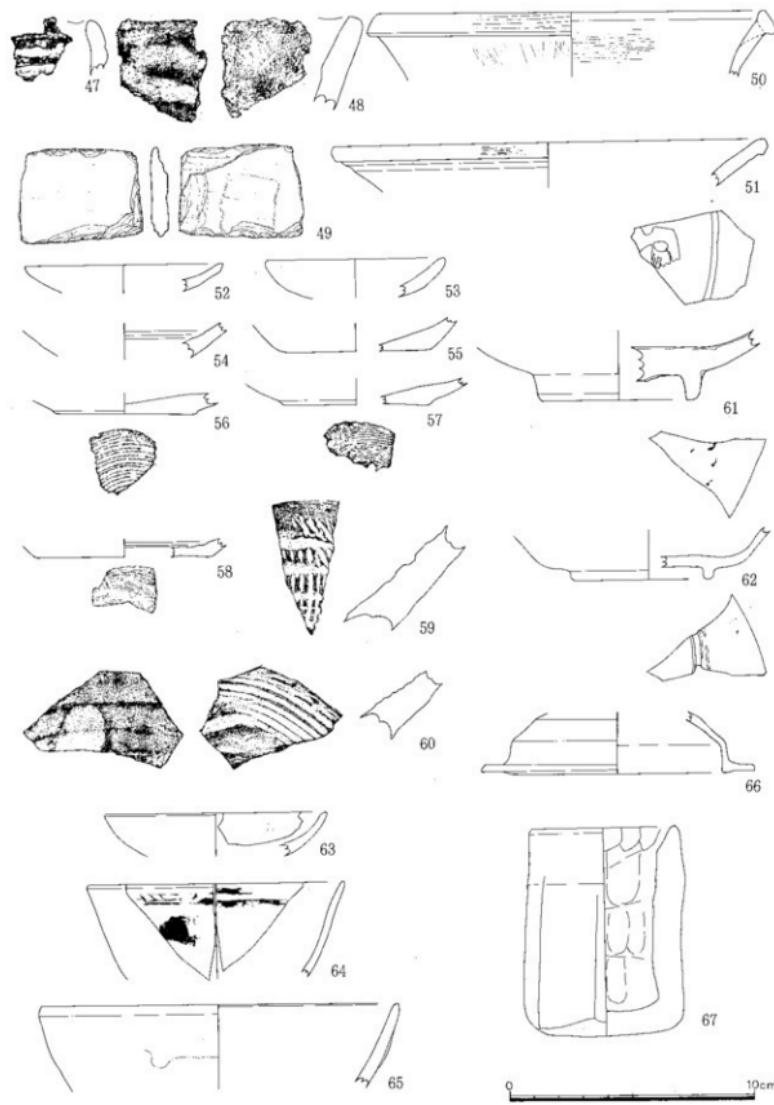
69は砂岩系石材を用いた礎石である。6面全体に断面半円形の加工痕を多数確認できる。この加工痕はその大部分が辺に対して平行もしくは垂直方向に施されている。

## 1 区出土遺物（第16図）

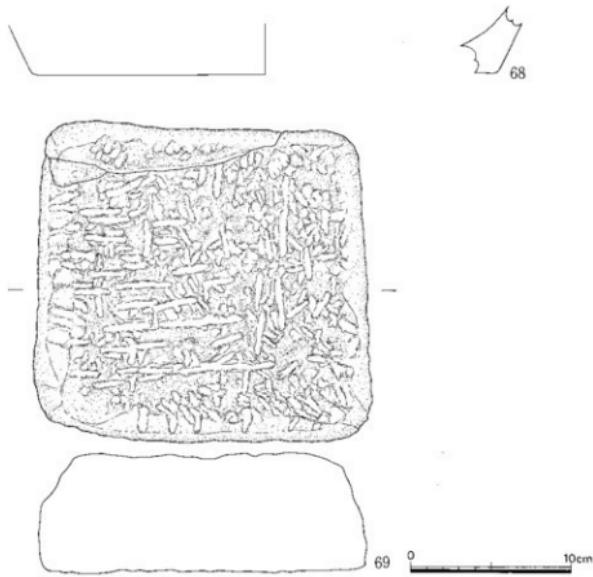
70は弥生時代後期末～古墳時代初頭に属する小底部を持つ鉢である。尖底気味の底部から口縁部に向ってやや内湾気味に大きく開く体部を持つ。外表面の成形・調整はタタキ後ナデ、内面は指頭圧後ハケを施している。

## 3 区出土遺物（第17図）

71はサヌカイト製のフレイクである。



第14図 2区出土遺物(1)



第15図 2区出土遺物(2)

72は瀬戸美濃産陶器の匣である。外面に花紋を描いている。鮮かな緑色の釉が外面上半部及び内面にも若干残る。17世紀頃の所産であると思われる。75は近代の染付杯である。断面逆三角形の高台を持ち、外面には「松葉」の文様を描く。73は16世紀代の輸入染付皿である。74は陶器碗である。18世紀頃の尾戸産であると思われる。

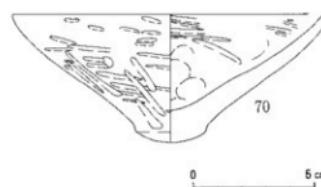
76～80は備前産と考えられる。76, 78, 79は擂鉢、77, 80は壺の体部である。78, 79は口縁部付近で78は5条以上、79は4条以上1束の擂目を持ち、78は内外面とも、79は内面のみナデ調整を行い、ともに口縁端部下端に重ね焼の痕跡が残る。また、79は片口を有する。77は体部である。7条1束の擂目を持ち、使用による磨滅がみられる。

#### その他の遺物（第18図）

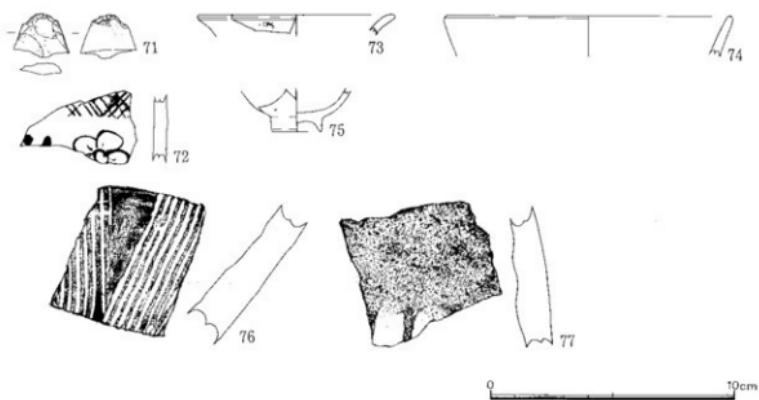
81はサヌカイト製のフレイクである。82は磁器碗である。83は龍泉窯系の青磁碗である。わずかな破片であるが、しのぎ蓮弁紋を有する。13世紀後半の所産である。84は備前系の陶器・擂鉢であ

る。7条以上1束の擗目を持ち、外面はケズリによる成形を行う。使用による磨滅が認められる。85、86は龍泉窯系の青磁である。85は碗でわずかに外反する口縁部と内面に界線を持つ。86は大皿か盤になると思われる。断面逆台形の高台を持ち、体部は内湾気味に外方へ広がっている。高台は露胎であるが、部分的に釉だれが見られる。

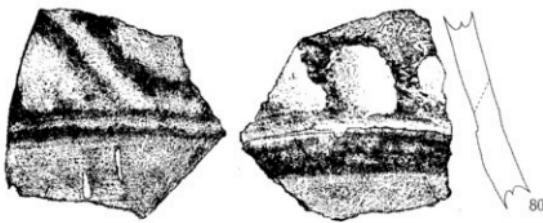
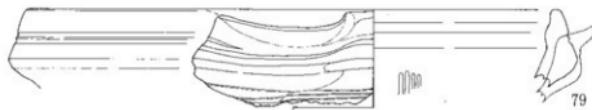
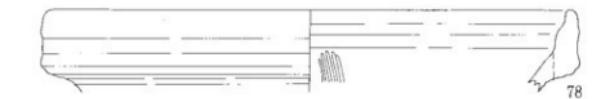
87は土器杯の底部である。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。底部に糸切りの痕跡が残っている。88は中世土鍋である。内湾気味に緩やかに開いた体部は口縁部付近で「く」の字形に折れる。外面指頭圧と部分的にハケ、内面は口縁部付近に細かいハケ、その下部に粗いハケを施している。89～91は五輪塔の部品である。このうち90と91は同じ塔を構成し、90は風輪、91は水輪となる。火輪と地輪を欠損する。89は水輪部分であり、他の3石を欠く。



第16図 1区出土遺物

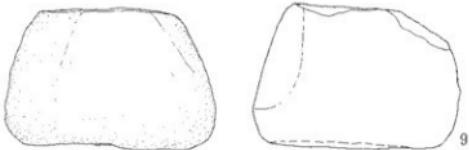
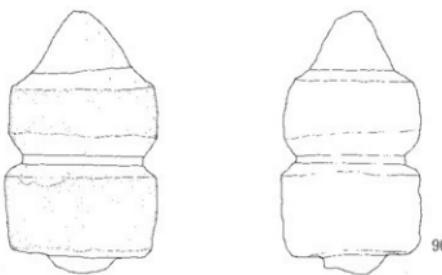
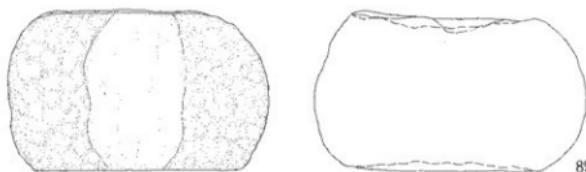
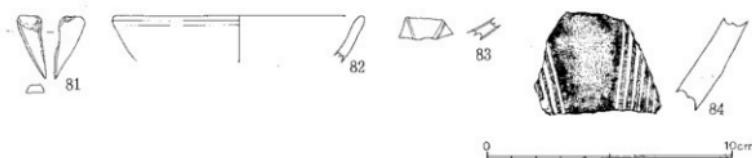


0 10cm



0 10cm

第17図 3区出土遺物



第18図 その他の遺物

第1表 遺物観察表

遺物番号	取上番号	遺物名	出土地点	器種	法量(cm)		特徴	備考		
					全長	径(幅)				
1	S X	2区	釘	釘	3.6	0.6	体部断面方形	鉄製		
2	S X	2区	釘	釘	(5.4)	0.4	体部断面円形、下方欠損	鉄製		
3	5	S X	2区	釘	4.5	0.4	体部断面方形			
4	11	S X	2区	釘	(4.9)	0.6	体部断面円形、下方欠損			
5	S X	2区	釘	釘	5.7	0.4	体部断面方形	鉄製		
6	S X	2区	釘	釘	(6.2)	0.6	体部断面方形、下方欠損	鉄製		
7	11	S X	2区	釘	5	0.3~0.8	体部断面反角形、体轍中央付近より「く」の字型に折れる			
8	S X	2区	釘	釘	(4.5)	0.4~0.5	体部断面方形、下方欠損	鉄製		
9	6	S X	2区	釘	(3.5)	0.9~1.1	体部断面方形、下方欠損	鉄製		
10	S X	2区	釘	釘	3	2.5	体部断面円形	鉄製		
11	S X	2区	釘	釘	2.9	0.3~0.5	体部断面方形	鉄製		
12	S X	2区	鉄製品		12.9	0.5~0.9	断面長方形	鉄製・蒙の一部		
13	S X	2区	古鏡	鏡	2.4	厚さ0.1	寛永通宝			
14	23	S X	2区	鍍金具	全長3.0	全幅1.0 厚さ0.1	釘孔(径1mm) 2孔			
15	12	S X	2区	磁器・人形頭部	径1~2.2	高さ0.9	側面に接合痕、内部は中空			
16	18	S X	2区	染付・皿	口径一 脚径一 深高(1.5)	底径5.8	見込みにひまわり(もしくは菊)文	16C代の輸入磁器		
17	S X	2区	磁器・瓶	瓶	9.2	—	口部が半円形で凹む、外側にわざわざ突出文様が施る	近代		
18	13	S X	2区	磁器・杯	4.4	4.6	3.7	底部外側にアラビ数字(0~7+2)の刻印	近代	
19	S X	2区	磁器・皿	皿	11.4	—	2.8	6.6	見込みに「萬」の暗文	近代
20	20	S X	2区	白磁・皿	—	—	(1.7)	8.4	低温で焼成されたためか、器面に電裂	E類(16C後半)
21	S X	2区	白磁・皿	皿	13.2	—	(1.1)	—		
22	S X	2区	灰釉陶器・瓶	瓶	12.6	—	(2.8)	—	口縁端部に鉄繪	17C~
23	3	S X	2区	陶器・碗(?)	—	—	(2.1)	—	体部外面下方にクロコ目	
24	S X	2区	陶器・皿	皿	12	—	(1.5)	—	体部下半は露胎	唐津
25	22	S X	2区	陶器・碗	—	—	(1.8)	3.5	高台は削り出しによる成形	唐津
26	S X	2区	染付	染付	—	0.9	(7.4)	—		
27	6	S X	2区	土師器・切引皿	9	—	(1.2)	—	口縁端部にタール付着	
28	25	S X	2区	土師質器・杯	11	—	(3.6)	5.4		
29	21	S X	2区	陶器	—	—	(6.4)	18.8	内面叩きによる成形粘土接合部下はナテ調整	
30	24	S X	2区	陶器・甕	—	—	(6.3)	—		備前
31	9	S X	2区	陶器・甕	—	—	(2.4)	—	底部のみ現存	備前
32	19	S X	2区	土師器・羽釜	—	鈴径6.4	(6)	—		時期不詳
33	6	S X	2区	陶器・甕	—	—	(24.8)	22.4	内外面ともナテ調整	19C 在地(?)
34	S X	2区	平瓦	全長5.7	全幅8.0	全厚1.6	側面に「御瓦(御)」の刻印			搬入品?
35	6	S X	2区	平瓦	(6)	(6.6)	1.4			在地産?
36	S X	2区	平瓦	瓦	(7.8)	(5.2)	1.7			在地産?
37	S X	2区	平瓦	瓦	(8.4)	(5.3)	2.3	上面から下面に釘が1本刺さる		
38	3	S X	2区	平瓦	(6.4)	(8)	2.1			
39	S X	2区	草瓦	草瓦	(4.4)	(4.1)	(0.8)			
40	10	S X	2区	平瓦	(6.6)	(4.6)	1.7			
41	15	S X	2区	平瓦	(11.7)	(10.8)	1.6			
42	S X	2区	平瓦	瓦	(10.8)	(5.4)	1.8			
43	8	S X	2区	平瓦	(7.9)	(5.7)	1.9			
44	14	S X	2区	平瓦	(6.3)	(13)	2.3	釘孔1孔、瓦当貼り付け部分に沈線5条		
45	1	S X	2区	丸瓦	(10.1)	(7.6)	1.1	コピキB手法		
46	S X	2区	丸瓦	瓦	(6.5)	(4.5)	(1.4)			
47	2区	織文・深縫	口徑一 脚径一 深高(1.8)	底径一	—	—	内外面とも摩滅のため調整不明			
48	2区	織文・深縫	—	—	(3.8)	—	内外面とも摩滅のため調整不明			
49	2区1層	石包丁	全長5.0	全幅3.8	厚 0.7			配質片岩製		

器物番号	登記番号	遺構名	出土地点	器種	法量(cm)	特徴	備考
50		2区	弥生・縄	口徑16.0 調様 -	高さ(2.8) 底径	内外面及び口縁端部にハケを施す	弥生後期終末
51		2区	中世・土断	26.6	- (2.9)	- 内外面とも摩滅が著しい口縁端部にハケ、内外面にナガの跡	
52		2区	土師質土器・皿	9.2	- (1.1)	-	
53		2区	土師質土器	7.4	- (1.6)	-	
54		2区	土師質土器	-	- (1.6)	内面のみロクロ目がみられる	
55		2区	土師質土器・杯	-	- (1.3)	6.2 摩滅のため調査不明	
56		2区	土師質土器・皿	-	- (0.9)	5.8 底部に回転糸切り痕	
57		2区1層	土師質土器・皿	-	- (1.1)	6 底部に回転糸切り痕	
58		2区	土師質土器・杯	-	- (0.8)	7.4 底部に回転糸切り痕・内面にロクロ目	
59		2区1層	陶器・罐跡	-	- (4.4)	- 5条以上1束の横目を持つ、使用による摩滅	備前
60		2区	陶器・罐跡	-	- (2.8)	- 底部付近をもつ、6条以上1束の横目	備前
61		2区	青磁・碗	-	- (2.8)	6.4 見込みにボタンのスタンプ	龍泉窯・18C後半
62		2区1層	染付・皿	-	- (2.1)	5.6 18C代の輸入進呈	
63		2区	染付・皿	9.2	- (1.8)	-	能茶(?)
64		2区	染付・碗	10.6	- (4)	-	能茶(?)
65		2区1層	陶器・碗	14.8	- (3.5)	-	能茶(?)
66		2区	陶器・蓋	10.8	- (2.6)	-	近代
67		2区	燒造壺	6	6.5 5	6.5 内面に布目狂紋、口縁端部ナギ調整がみられる、完形	近世
68		2区1層	陶器・底部	-	- (4.2)	28.6 両側打撲、輪廓線が鋭敏で底面に凹面打撲	
69		2区	礫石	全長20.0 幅幅19.4 全厚7.4	-	-	花崗岩系石材
70		1区	弥生・鉢	口径13.1 調様 -	高さ(5.3) 底径(2.0)	内面端部に16形後づき有、外面ナギ打撲痕付	弥生後期終末～古墳時代初期
71		3区	フレイク	全長1.9	幅幅2.3 全厚0.5	-	サヌカイト製
72		3区1層	弥生・皿	器高5.2	輪幅2.9 厚さ0.5	外側に花紋	17C戸田美濃
73		3区	染付・杯	LJ径 -	調様 - 器高(1.8) 底径2.0	体部外面に「松葉」の文様	近代
74		3区	染付・皿	8.2	- (0.9)	-	18C代の輸入進呈
75		3区1層	陶器・碗	11.8	- (1.7)	-	18C尾州(?)
76		3区1層	陶器・罐跡	32.2	- (5)	- 5条以上1束の横目を持つ	備前
77		3区1層	陶器・罐跡	-	- (6.8)	- 7条1束の横目、使用による摩滅がみられる	備前
78		3区	陶器・甕	-	- (5.7)	-	備前
79		3区1層	陶器・罐跡	34.8	- (6.2)	- 4条1束以上の横目、片口を持つ	備前
80		3区	陶器・甕	-	- (8.2)	-	備前
81		不明	フレイク	2.4	1 0.3	-	サヌカイト製
82		不明	磁器・碗	10.2	- (1.9)	-	
83		不明	青磁・碗	-	- (1)	外側にしおぎ蓋弁紋	龍泉窯・18C後半
84		不明	陶器・罐跡	-	- (3.7)	- 7条1束の横目、使用による摩滅がみられる	備前
85		不明	青磁・碗	18.4	- (2.1)	-	龍泉窯系14C初～15C前半ごろ
86		不明	青磁・皿(焼?)	-	- (3.8)	9.8 龍泉窯系	
87		不明	土器・杯	-	- (2.2)	6.6 底部に回転糸切り痕	
88		不明	中世・土器	44.4	- (6.9)	-	
89		不明	五輪塔	全長13.0	全幅21.3 全厚11.1	「水」の部分 他に3石を合わせて1個体	
90		不明	五輪塔	21	12.4	- 「空」の部分 9石及び他に3石を合わせて1個体	
91		不明	五輪塔	11.7	12.2 11.2	- 「水」の部分 90石及び他に2石を合わせて1個体	

## 第IV章 まとめ

### 第1節 長宗我部地検帳から見た本山氏の土居について

長宗我部地検帳（以下、「地検帳」）に記載のある本山氏の土居とされているものは、本山郷内に限ってみると、当遺跡である「永田村」「同じ北土居」と「土居村」の「本山御土る四方ツイ地」および土居村「ヒガシ土る」の3つがある。上居村は現在の本山町5区付近に相当するが、土居の比定はなされていない。地検帳では土居村「ヒガシ土る」が本山兵庫の主居となっている他はいずれも本山采女の所有となってはいるが、天正17年（1597）の段階では采女は永田村に居住し、土居村の土居は散田となっている。采女の永田村への転居以前の住居は地検帳に土居村「采女古ヤシキ」とあるように土居村「本山御土る」の近くに屋敷を構えており、検地時も「本山采女給」「中ヤシキ」として残っている。

地形的に見ると永田村の土居は本山城のはば真北、小丘陵上に立地し、三方に吉野川を眺望することができる。一方、上居村の「本山御土る」の位置は比定されていない。地検帳では「本山御土る」の周囲に「高タ」「西キト」と見える。これらはそれぞれ現在の「高田」「西木戸」にあたると考えられ、その周辺に土居を推定することができる。「ヒガシ土る」もこの近辺、やや東よりにあたると考えられる。土居村は東西に広がる平野の中、中世本山郷のはば中央部に位置する。

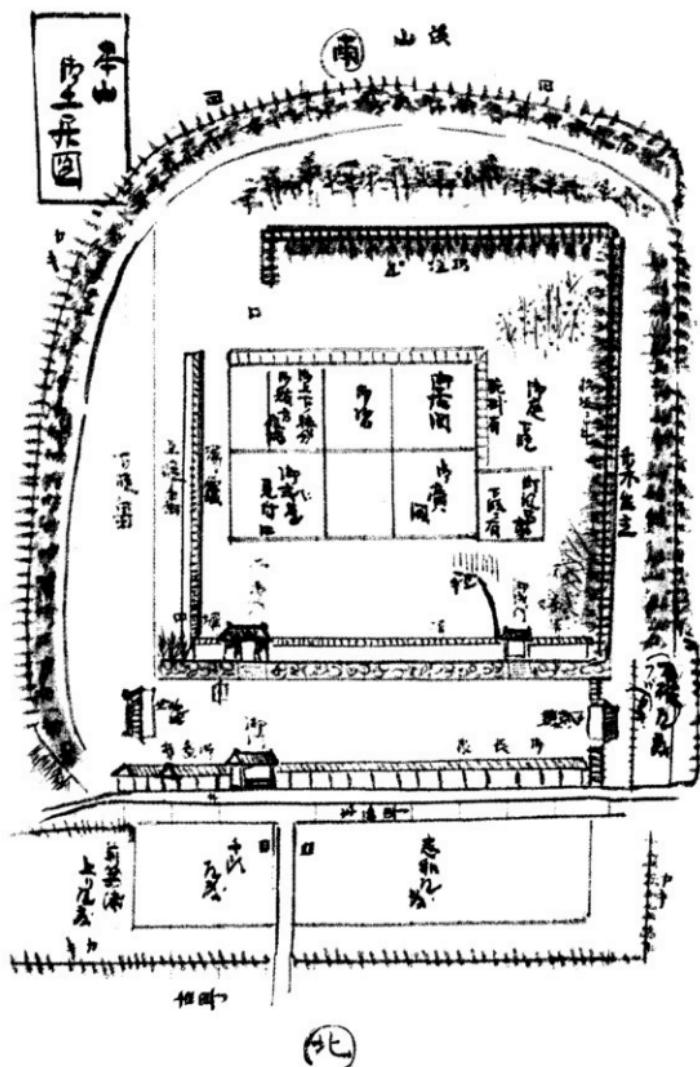
地名や周囲の状況を見ると、土居村は現在は消滅しているものの、天正17年の段階で十居そのものが村名となっており、土居の周囲には大小の様々な屋敷が建ち並んでいる。明治の地籍図には永田村の土居（上街公園）の周囲に「東土居」「南土居」という地名が見られるが、これは近世以降のものであろう、地検帳には見られないホノギである。この周囲にも土居村と同様に多くの屋敷が存在するが、これらの中には永田村に隣接する十王堂村の十王堂やそれに付随する施設も見られる。

これらの本山氏の土居について様々な研究が行われている。その多くは土居村の「本山御土る」を本山城の土居とするものであるが、土居は土居村の「本山御土る」と永田村の「北土居」の2つあったとするもの、また「本山御土る」から永田村「北土居」へと移されたとするものなどがある。しかし、その立地条件や上居を取り巻く瀬境などからは現在のところ、確実な定説となり得る材料は見あたらない。

### 第2節 土居屋敷跡遺跡出土遺物について

当遺跡の遺物の時期は縄文時代、弥生時代終末のものが若干存在する他は概ね中世以降であり、その量に多寡はあるものの、各時期にわたって連続と遺物の出土がみられる。それらの中には明確な時期を与えられないながらも、中世以降の所産であるものが多く存在する。

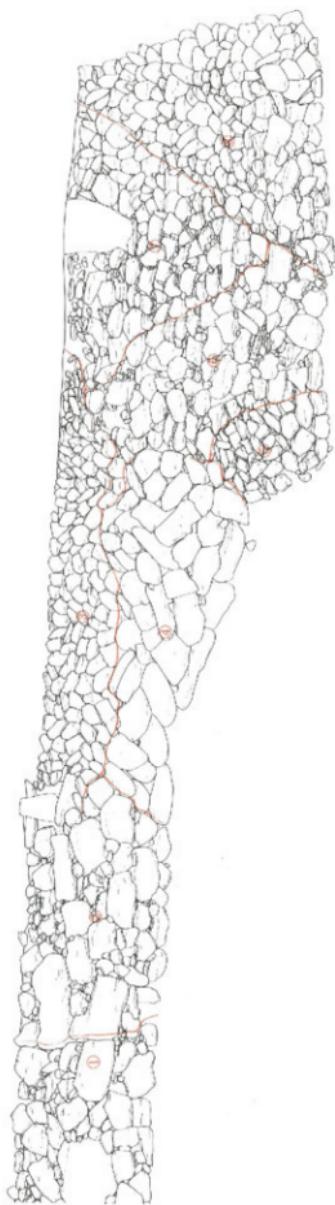
中世段階の遺物は16世紀以前と16世紀代の2時期に分けられる。前者は遺物の出土量が少なく、

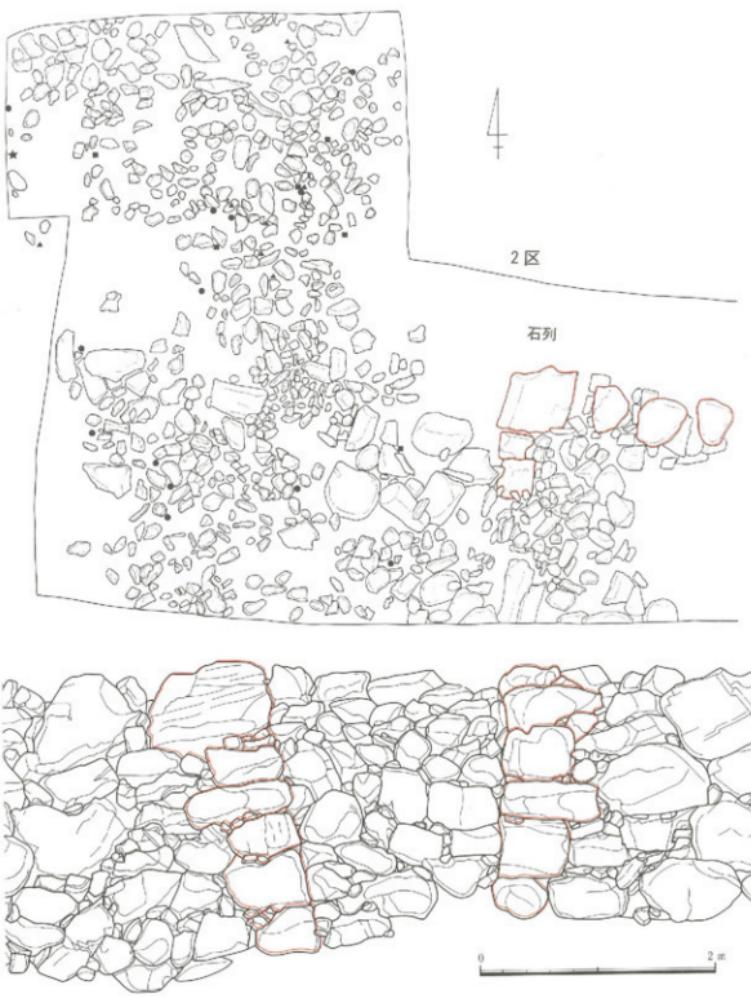


第19図 本山土居繪図（『皆山集第一卷』より転載）

0 2 m

第20図 石垣南面東端の構造





第21図 裏門跡

中世でも比較的古い段階の鍋及び13世紀後半の青磁の破片が各1点、計2点が出土したのみである。後者についても遺物量は決して多いとは言えないが、染付皿が3点ある他は、白磁皿、青磁碗が各1点、計5点出土している。

本山城跡は現在のところ発掘調査は行われておらず、不明な点が多い。しかし他の地域を見ると1467年の応仁の乱後、16世紀にかけて平地の居城から山間部の山城へと移行する例が多くなっている。一方16世紀後半頃、本山氏が長宗我部氏に敗れてしまらくの間土居屋敷は本山因幡守の子采女の居住地になる。これらのことから考えると、本山氏も15世紀後半以降、居城を山上の本山城跡に移していると考えられる。天正17年（1597）の検地以前の様相は不明であるが、いずれにしても16世紀代の遺物はおむね采女の時代のものである可能性が高いことになる。

近世は18世紀を境に大きく2時期に分けられる。その画期は参勤交代の北山ルートへの変更がなされた頃である。それまでは特定の人物の居住地であったもの（前期）が、以後は参勤交代の宿泊所として利用されるようになる（後期）。

近世の遺物について陶磁器の碗、皿についてみれば、前期の遺物には灰釉陶器碗、瀬戸美濃産皿、堺産焼塩壺が各1点ずつ見られるように搬入品が目立つ。一方、後期になると尾戸焼と思われる陶器が1点、能茶山焼と思われる陶器や染付が3点となり、在地の製品が現われる。出土遺物の総数は前期3点、後期4点の計7点である。遺物の総数こそ出土量は少ないが、それらの割合は前期4：後期6となっている。前期の搬入品から後期の在地産陶磁器への移行について汲み取ることができよう。

調理具や貯蔵具については備前焼の擂鉢（18世紀後半以前）、壺が多数を占める中、在地産の可能性のある19世紀代の壺が1点のみ存在する。

瓦に関しては近代以降当遺跡のS X 1が祠の跡であったものと思われ、それに伴うものである可能性が高い。釘もそれに使われていた可能性がある。その他の金属製品などは近世の可能性もあるが、これらと同時に近代陶磁器が多く出土しているため、にわかに時期決定を行うには至らない。

### 第3節 本山土居屋敷の石垣について

土居屋敷は現在では上街公園として残っている。ここの中段から上段に向かって石垣が現存しているが、石垣の出現は高知県下では岡豊城から天正3年（1575）の記年銘瓦が出土しており、その頃であるとされている（注1）。また、長宗我部地検帳に「本山御土ゐ四方ツイ地」とみえるように、本山城の土居の1つといわれるものでも石垣は持っていない（注2）。このことから土居屋敷の石垣は中世末から近世にかけて築かれたものであると推定される。

土居屋敷の立地や環境等を示す資料として『告山集』の絵図がある。これは江戸時代のものであるが、今回調査を行った南側の石垣に限ってみると次の2つのことがわかる。

1. 現状では東端から西端まで狭い階段を除いて切れ目なく巡らされているが、『告山集』では南東角部分が途切れており、そこに門が存在している。
2. 石垣の中ほどに門が存在した痕跡がある。

1について第20図を見ると、明らかに大きさ、積み方の異なる石が東端部分に集中しており、この部分は後世に構築されたことが分かる。この部分を細かく見ると石の目に従ってさらに幾つかのブロックに分けられることが分かる。(⑥～⑧)については落し積みによって一気に築かれたものであると考えている。さらに(⑥)の石材としては一部ブロックが使われており、従ってこの部分は昭和に入ってからの拡張であることが分かる。(③)は崩落もしくは転用した石材を補填するために積まれたものであろう。(⑥～⑧)よりも後の構築である。(⑤)は(②)を積んだ後すぐ、ほぼ同時に積まれたものである。(⑤)も(②)、(④)構築時に、それより先行して積まれたものであろう。(①)と(②)についてはここで石の目が通っており、石垣構築時に時期差があるのかもしれない。いずれにしても石垣そのものの調査は行われていないが、いずれ調査されることになれば『皆山集』編纂当時に存在した門の範囲が確定されると同時にそこに遺物が含まれているとすれば構築時期は不明ながらも廃棄されていく様子やその時期が概ね特定されよう。

2については第21図のように中央部やや西よりで下端で約1.5m、上端で約2mの間隔をおいて2ヶ所石が面を揃えて積まれており、その間に石が充填されている。さらにこの内側においても中に向かって面を揃えた石列が現存で4つ検出され、ここが通用門のようなものであったことを窺わせる。ところが『皆山集』の絵図ではこの位置に門の記載ではなく、『皆山集』編纂時には既に埋没していたか、省略されていた可能性がある。

本山町には「裏門」というホノギが長宗我部地検帳において見受けられ、それは現在においてもなお小字として残っている。『皆山集』に見られる「門」とこれと今回検出された「門」のどちらがホノギの由来となる裏門かは不明であるが、いずれにしても門の存在とホノギの由来との関連性を推察できる資料となろう。

#### 【注】

(1) 吉成承三 1995 「蒲戸城跡」高知市教育委員会

(2) 森田尚宏・松田直則 1990 「阿豊城跡」高知県教育委員会

## 第4節 焼塩壺について

焼塩壺の産地には泉州湊村（後に大阪に移る）、堺町内、泉州麻生、播磨、京都木野、京都深草などが知られている。焼塩壺は産地によってその製法が異なっている（注1）。近年、焼塩壺についても刻印や形態から編年・分類が行われ、さらに文献等と照らし合わせて研究が進められている。ここでは基本的に渡辺誠の分類・編年をもとに（注2），四国内での焼塩壺について考察していく。

### 焼塩壺の分類

身A 布を巻いた芯に粘土紐を輪積みにする。器壁はやや丸みを持った底部から内弯気味に立ち上がり、胴上部でくびれ口縁部へ。17世紀代を通じて存在する。

身B 布を巻いた芯に粘土板を巻きつけて成形。粘土紐を詰め込んで平らにした底部から直立も

しくは緩やかに内窓しながら開く体部を持つ。口縁部は段状に作られ蓋受けとなる。また底部と体部の境に明確な陵を有する。17世紀末～18世紀前半に属する。

**身C** Bと同様な形態であるが、蓋受けが退化したもの。18世紀後半から19世紀初頭までの所産である。

**身G** 制作技法等に身Aとの関連が認められるものの、器高が小さいもの。

**蓋A** 上面が丸みを帯び、内面に布目を有するもの。

**蓋B** 断面逆四字形で内面に布目を有する。

なお、渡辺氏は焼塩壺の形態をA～L、蓋をA～Dまで分類している。

第2表 四国の焼塩壺の形態と個数

蓋	A	B	計
高知県	7	4	11
徳島県	0	8	8
香川県	0	3	3
愛媛県	0	0	0

④ その他はBとCの判別がつかないものが該当する。

### 高知県の焼塩壺（第22図No.1～4）

高知県では本山上居屋敷跡、高知城（注3、4）、安芸市五藤家屋敷（注5）の他、高知市はりまや町四国銀行本店（注6）や同市土電会館（注7）の建設工事中に出土している。

身Aに該当するものは土居屋敷、四国銀行、土電会館出土の各1点及び高知城の5点、五藤家屋敷2点の計9点である。この中には後述する身Aと身Gの中間品も含めた（第23図）。形態的に2を除く身Aセットになる蓋は蓋Aであり、高知城から4点が出土している。身Bが1点、身Cが6点である。これらとは蓋Bがセットになり、同じく高知城より7点の出土を見る。また身BとCの判別がつき兼ねるものには高知城の4点である。以上あげた焼塩壺の中の4点（1～4）が刻印を持ち、はっきりと読めるものは4の「…伊織」である。3は枠とわずかに文字の一部が現存している。「織」の一部であろう。その他2は枠が若干残存し、1も刻印は存在しているが剥落しており判読は不可能である。1は高知市土電会館、2～4は高知城からの出土である。3の刻印は1行で構成されるものである。「伊織」銘を持つ刻印で1行からなるものは「泉湊伊織」のみが存在し、これにあたるものと考えられる。したがってこれは身Cであり、18世紀後半という時期を与えることができる。

### 香川県の焼塩壺

香川県からは焼塩壺の出土例はほとんどなく、近世町屋跡である高松市紺屋町遺跡（注8）出土の3例のみである。これらはいずれも蓋であり、蓋Bに相当する。18世紀代の所産である（注6）。

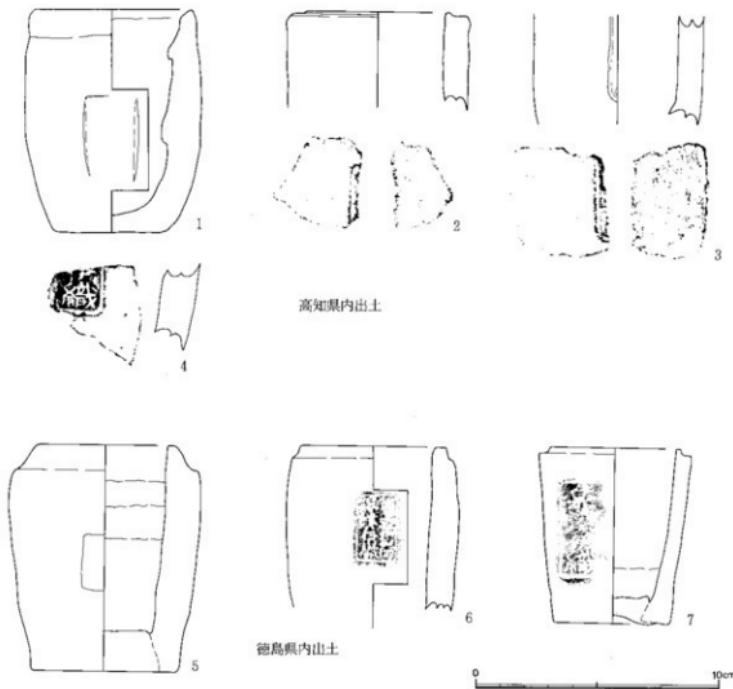
### 愛媛県の焼塩壺

愛媛県では武家屋敷跡である深草町遺跡（注9）からAタイプの身が1点出土している。その他、松山市松山城二の丸跡からも何点か点出土しているらしいが、その詳細は不明である。

### 徳島県の焼塩壺（第22図No.5～7）

徳島県では、城ノ内遺跡徳島城跡お花畠地点（注10）からの身11点、蓋8点の合わせて18点が知られる。身ではBが6点、Cが1点、BとCの区別がつき兼ねるものが4点存在し、Aは存在しない。これらの中で刻印を持つものは5～7の3点である。5は刻印が剥落しており内容は不明であるが、他の2点は各々「泉湊伊織」、「御壺塩師 堀渕伊織」である。前者はB、後者はCの形態を持つ。蓋は8点のすべてがBである。

時期的には身・蓋とも18世紀中葉ごろにもっとも集中している。



第22図 刻印を持つ四国の焼塩壺

第3表 刻印を持つ焼塩壺掲載報告書

図番	山土遺跡	掲載報告書(注)	掲載ページ	報告書図番
1	高知市はりまや町土電会館			
2	高 知 城	高 知 城 跡	1 3	3 2
3	高 知 城	高 知 城 跡	1 3	3 7
4	高 知 城	高 知 城 跡	1 3	3 6
5	徳 島 城	城 ノ 内 遺 跡	1 4 6	3 7
6	徳 島 城	城 ノ 内 遺 跡	1 1 0	1 1 2
7	徳 島 城	城 ノ 内 遺 跡	8 1	1 3 5

(注) 高知城跡：「高知城跡」「伝合所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書」高知県埋蔵文化財センター  
1995.3  
城ノ内遺跡：「城ノ内遺跡徳島城跡お花畠地点発掘調査報告書」「県武道館・弓道場に伴う発掘調査報告書」徳島県教育委員会文化課 1988.3

四国各県から出土している焼塩壺はいずれも堺の製品である。第23図については外見上は身Aと変わりないが、容量が小さくなっている。渡辺氏によればAとGの中間型として少數ではあるが存在するらしい。また、胎土に金雲母を含んでいるこのタイプは堺の製品だそうである。

十佐および阿波から「伊織」銘の刻印を持つものが数点出土しているが、「堺鑑」によれば「伊織」銘は天文年間（1532～54）に湊村に来住して壺焼塩を始めた藤太夫が承応3年（1654）「天下一」の美号を女院御所より拝命した後、延宝7年（1679）に貰った呼び名である。これに伴い刻印も「ミナと簾左衛門」→「天下一堺ミナと簾左衛門」→「天ド一御壺塩師堺湊伊織」と変化する。その後天和2年（1682），幕府より「天下一」の使用を禁止され、「御壺塩師 堀湊伊織」→「御壺塩師 泉湊伊織」→「泉湊伊織」となる。一方刻印を持たないものに関しては渡辺分類身A～C類は堺の製品に限られている。

ところで焼塩壺は城跡、武家屋敷、豪商の屋敷などある程度以上の権力者のものとから出土していることが知られている。四国内においても高知県では四国銀行本店及び土電会館ではそれを含む環境は不明であるが、それ以外では城や武家屋敷であり、徳島県においても城、愛媛県でも城及び武家屋敷である。しかし、香川県では高松城からの出土は知られておらず、町屋跡からの蓋3点が出土しているのみであり、その点が興味深い。

また、先程四国内の焼塩壺は概ね堺の製品であることは触れたが、それらが所属する時期についても地域によってある程度偏りが見られる（第3表）。焼塩壺が最も早く搬入されるのは高知県であり、それは17世紀頃である。個数が最も多いのもこの時期である。その後18世紀前半頃になって個数は落ちるが、18世紀後半になると再びその数は増加する。徳島県で最初に搬入されたのは18世紀前半頃で、徳島県全体でみてもほぼこの時期に集中している。香川県は焼塩壺にあまり馴染めなかったようである。愛媛県においては出土量が明確でなく、詳細は不明だが伊予松山周辺においても焼塩壺は生産されていたらしい（注11）。

なお、焼塩壺の製造・販売は規模の差はあるものの16世紀中葉から20世紀中葉太平洋戦争ごろまで行われている。生産にこれほどの時代幅がありながらも、四国各地とも量の差はあれ短期間焼塩

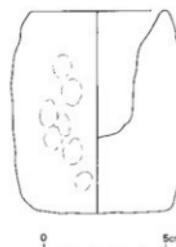
壺を購入しているのみであり、近世の四国に焼塩壺はあまり浸透しなかったようである。その背景として考えられるのは中央の食文化の不浸透である。

近世以降、戦後しばらくまでは瀬戸内海沿岸で塩業が盛んに行われていたが、塩田で作られたのは粗塩である。粗塩は第1次生産によるものであり、焼塩はそれらをさらに加工した、現在でいうところの食卓塩であって、焼塩壺の使用状況についても渡辺氏によってすでに紹介されている（注2）。幕末の瓦版には二の膳の上に「かけしほだい」として焼塩壺がマダイとセットで描かれており、焼塩壺が食膳で用いる調味料であることが分かる。

ところで、四国内において徳島と高知ではその出土数も決して少ない方ではない。しかし、焼塩壺は京都・大阪を中心とする近畿地方や江戸を中心とする関東一円においても数多く出土している。その量は四国の比ではなく、1遺跡で四国全体の出土量を上回る場合も少なくない。絶対的な人口の格差もあるが、それに加え四国の場合は搬入時期に偏りが見られる。高知の場合は各時期を通じて比較的安定した供給が見られるが、徳島県の場合は18世紀中葉頃に集中し、香川県と愛媛県にはわずか数点の搬入が見られるのみである。この点については焼塩壺による「かけ塩」という食文化が受け入れられなかったということが窺える。多少は用いられてもそれが定着するには至らなかつたのであろう。

#### 【注】

- (1) 渡辺 誠 1985 「物流の流れ—江戸の焼塩壺」『季刊考古学』第53号
- (2) 渡辺 誠 1992 『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会 吉川弘文館
- (3) 近森泰子 1994 『高知城跡 1—御台所里敷跡発掘調査報告書—』 財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター
- (4) 宮地早苗・曾我貴行 1995 『高知城跡』 財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター
- (5) 松田直則 1983 『五藤家屋敷』 安芸市教育委員会
- (6) 間本健児 1991 「焼塩壺の一資料」『埋文こうち』第4号 高知県教育委員会文化振興課
- (7) 1996 『高知県立歴史民俗資料館年報』平成7年度 側高知県文化財団歴史民俗資料館
- (8) 山本英之 1986 『紺屋町遺跡』『木能研究』
- (9) 土居光一郎・伊藤祐三 1996 『深草町遺跡Ⅱ』 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- (10) 松永住美 1988 『城ノ内遺跡徳島城お花畠地点発掘調査報告書』 徳島県教育委員会文化課
- (11) 田中一廣 1995 『京の「焼塩壺」二種』—中ノ院家出土遺物補遺と妙心寺塔頭遺物その後—』『花園史学』第16号



第23図 焼塩壺の中間品（高知城出土）

写真 1

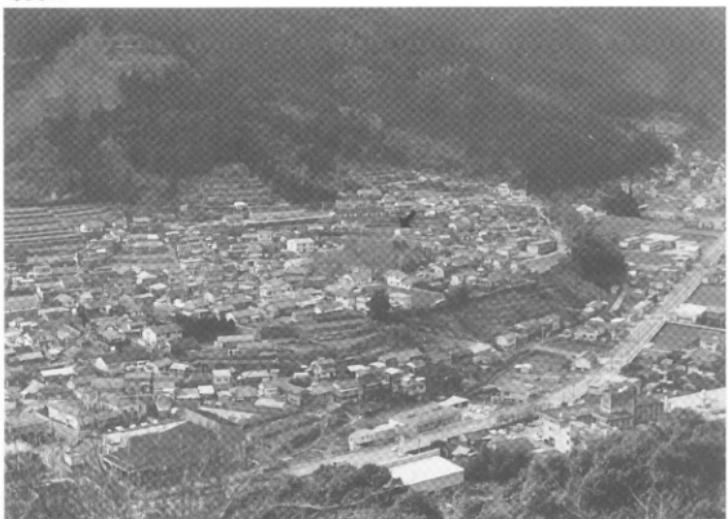


調査区遠景（北東より）

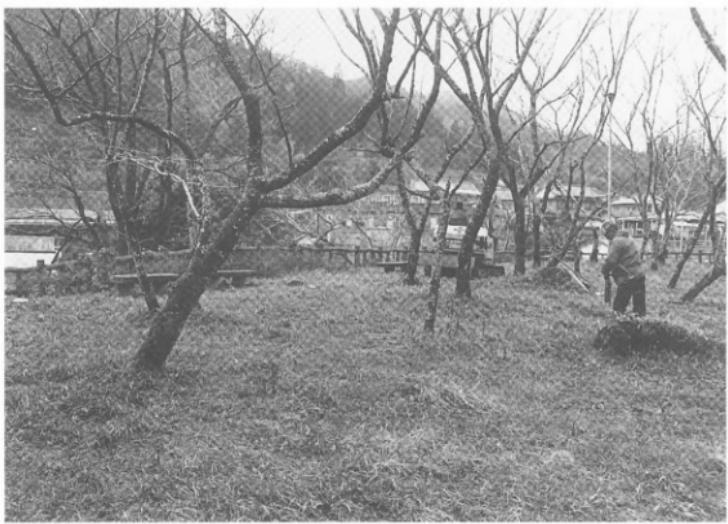


調査区遠景（南より）

写真2



調査区遠景（北東より）



調査前の風景

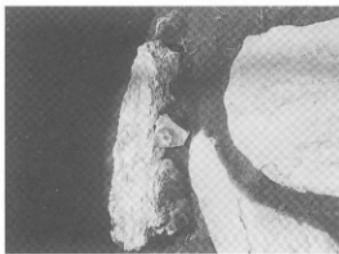
写真 3



S X 1 全景



S X 1 №.20



S X 1 №.16



S X 1 №.31



S X 1 №.15

写真 4



2区石列検出状況



2区全景（東から）



2区全景（西から）



作業風景



作業風景

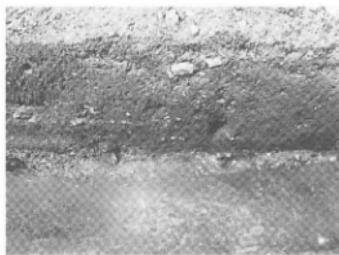
写真 5



石列検出状況



2区遠景



2区土層



1区全景



1区遺物出土状況

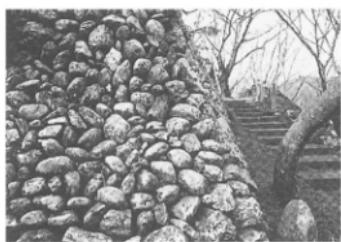
写真 6



南より西面石垣



東面石垣



階段（南より）



東より南面石垣



南東角石垣



南東部階段

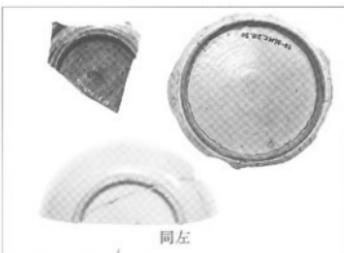
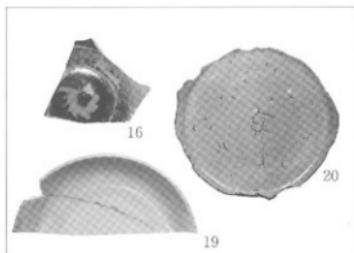
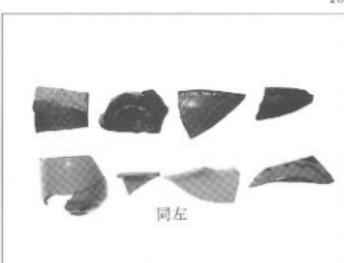
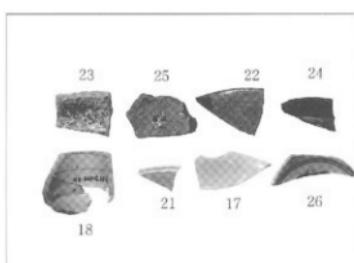
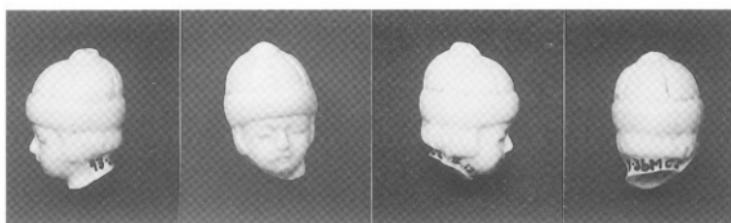
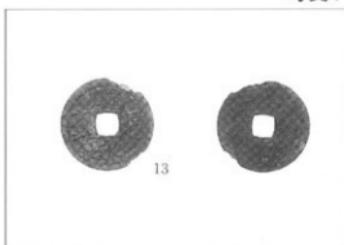
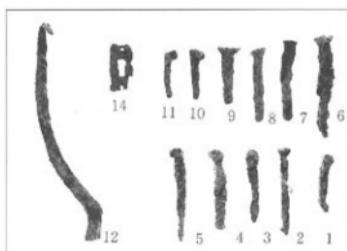


裏門跡



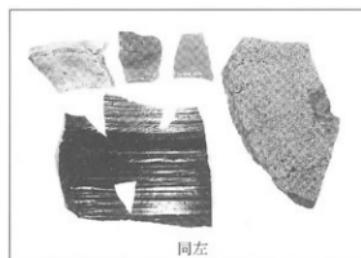
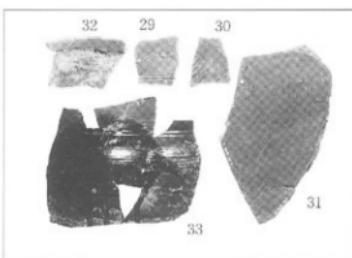
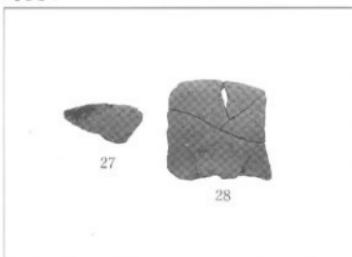
裏門跡

写真7

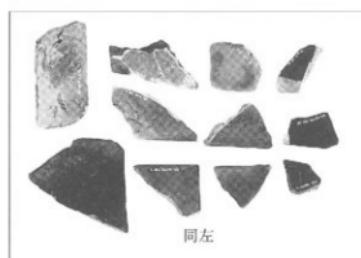
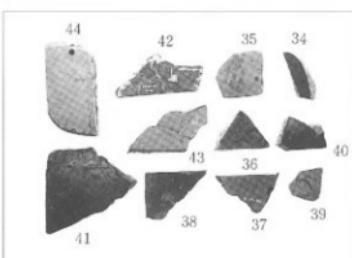


S X 1 出土遺物

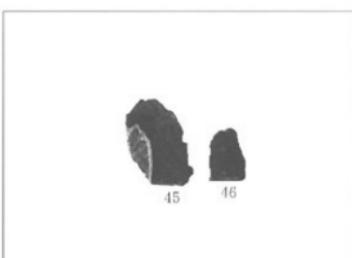
写真 8



同左



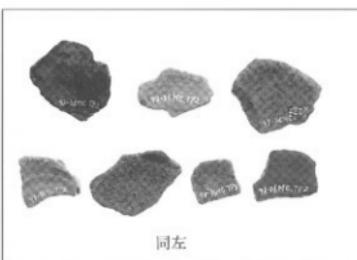
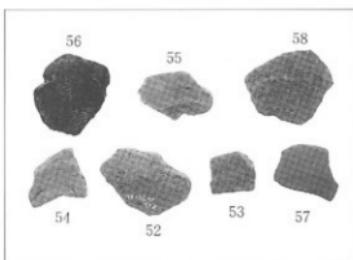
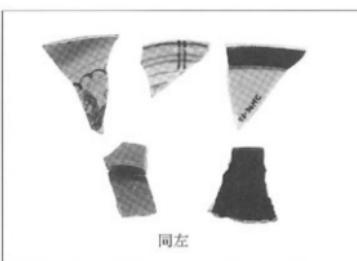
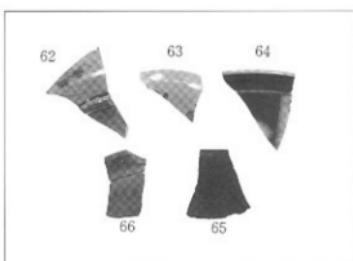
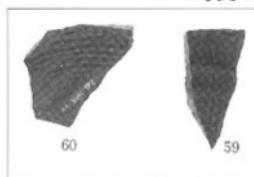
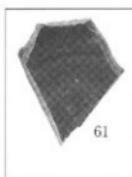
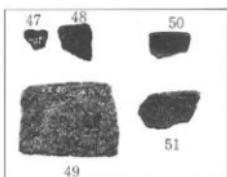
同左



同左

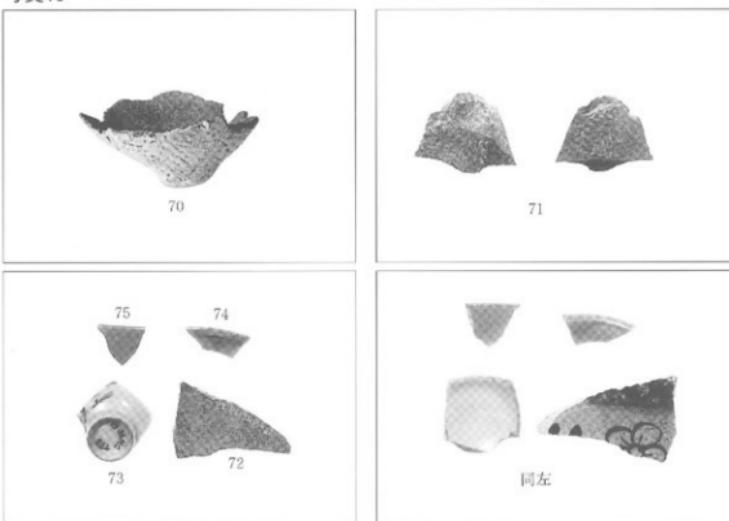
S X 1 出土遺物

写真 9

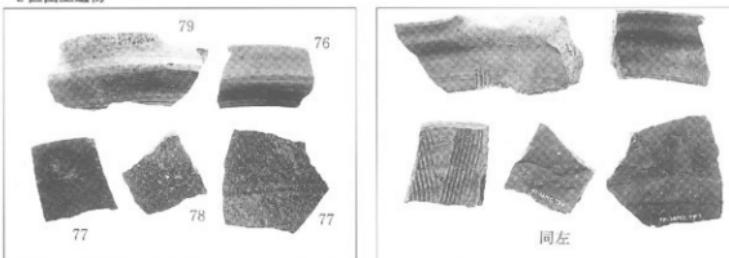


2区出土遺物

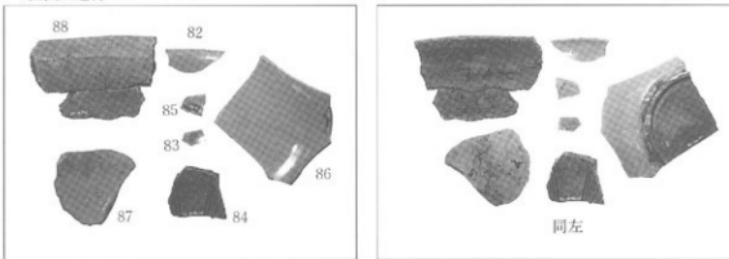
写真10



2区出土遺物

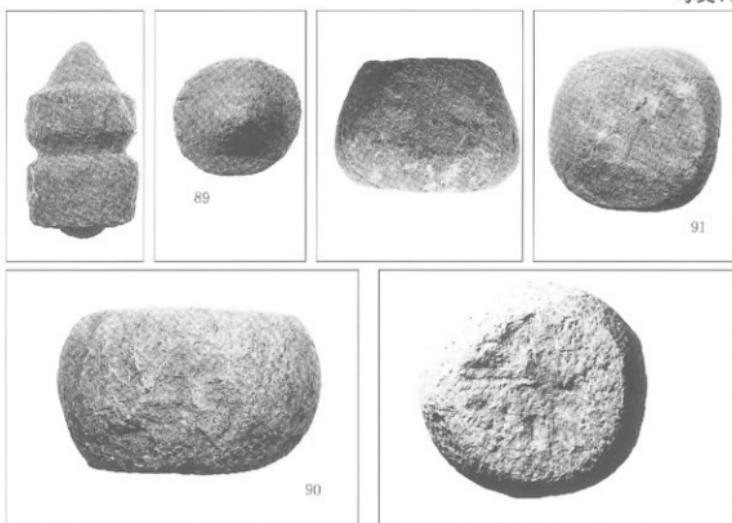


1区出土遺物

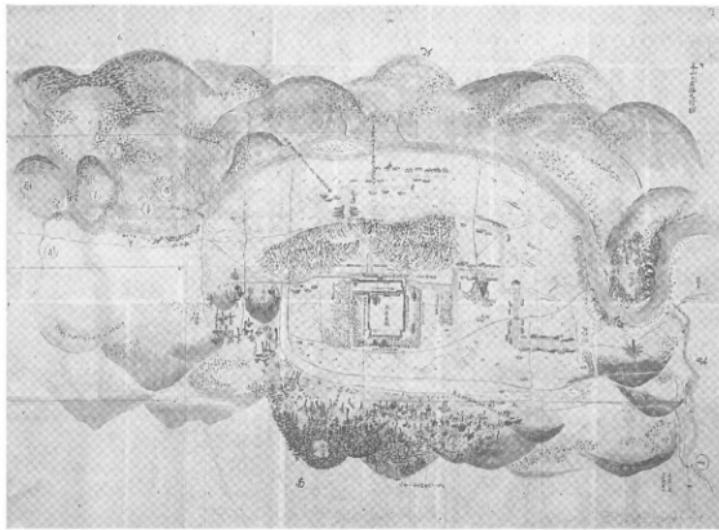


3区出土遺物

写真11



その他の遺物



本山土居之構絵図（安芸市蔵）

## 報告書抄録

ふりがな	どいやしきあといせき						
書名	土居屋敷跡遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	本山町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第9集						
編著者名	前田光雄・松田重治						
編集機関	高知県長岡郡本山町教育委員会						
所在地	高知県長岡郡本山町本山						
発行年月日	1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>
		市町村	遺跡番号				
どいやしき あといせき 土居屋敷 跡 遺跡	こうちけんがおかぐん もとやまちょうもとやま 高知県長岡郡 本山町本山 337-2	39341	250025	33度 45分 15秒	133度 5分 30秒	平成7年 2月21日 と 同 3月17日	約62
事前調査							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
土居屋敷 跡 遺跡	集落跡、 屋敷跡	縄文時代後期・ 弥生古墳時代・ 中近世	近世門跡、近 世近代祠	縄文土器、弥 生古墳土器、 中近世陶磁器 類	近世文献上に 現れない門跡 を確認。		

本山町埋蔵文化財調査報告書 第9集

## 土居屋敷跡遺跡

編集・発行 高知県長岡郡本山町教育委員会

発 行 日 1998年3月31日

印 刷 ドキュメント工房ひまわり